平安古（ひやこ）伝建地区・鍵曲（かいまがり）

歴史が生き続けるまち
～萩～

日本海に面した城下町、萩焼、なまこ壁の長屋門、高杉晋作や伊藤博文ら多くの偉人を輩出した松下村塾（しょうかそんじゅく）など歴史あるまちとして知られている萩市。また、「明治維新胎動の地」としても日本史に名を刻んでいる。しかし、政治や経済の中心が山口市へ移されたことにより、維新後の慌ただしい近代化の波に乗り遅れてしまう。昭和に入り日本の風景が激しく変貌していく中、萩には昔のままの原風景が今でも残っている。

●萩焼
優しい風合いが魅力

萩によういでました

今回の取材に協力いただいた萩の魅力案内人 山本明日美（あすみ）さん。NPO萩まちじゅう博物館に勤務し、萩市に住む人が萩の魅力を再発見し、萩市を訪れた人に萩の良さや歴史を正しく知ってもらう機運づくりに、忙しい毎日を過ごしているという。「萩によういでました！」（山口県の方言で『ようこそいらっしゃいました』という意味）となんとも心地良い言葉を掛けてもらい取材が始まった。

萩市は、市内にあった萩市郷土博物館の後継となる新博物館（萩博物館）の建設を検討していた中、萩には多くの歴史・文化・自然のお宝があり、そのお宝を現地でありのままに展示・保存されている資料と考えると、市全体が屋根のない博物館＝「まちじゅう博物館」とみなすことができるという「萩まちじゅう博物館構想」を策定した。この構想を市民の手で推進する団体として平成16年にNPO萩まちじゅう博物館が設立された。拠点施設である萩博物館の運営や、古地図で巡るまち歩きツアーの実施、萩の昔話を紹介する紙芝居の上演などを行い、この構想を市民や観光客へ浸透させる活動に取り組んでいる。

行く先々で市民の目線で萩の説明をしてくれる山本さん。実は萩市出身ではなく佐賀県生まれと伺う。大学の時、都市計画・まちづくりを学ぶために萩市に来て以来定住。NPO萩まち

NPO 萩まちじゅう博物館　山本 明日美さん

萩・明倫学舎

明治維新150年記念事業として旧萩藩校明倫館跡地に建つ旧明倫小学校の校舎を改築し、本年3月にオープンした萩の観光起点施設。本館（無料）・2号館（有料）と分かれており、本館では、萩観光の起点としてのインフォメーションセンター、藩校明倫館から旧明倫小学校までの300年の歴史に触れる展示室、萩の大地（ジオ）1億年の成り立ちを紹介する「ジオパークビジターセンター」などが連なる。2号館には、「世界遺産ビジターセンター」や江戸時代の科学技術史や幕末の歴史に関する資料を多数展示する「幕末ミュージアム」がある。

萩の名店「割烹 千代」が館内に出店している「カフェ・レストラン萩暦（はぎごよみ）」。日本海で獲れた魚や地元の野菜を振る舞う。熊谷喜八シェフやアル・ケッチァーノの奥田政行シェフ監修のメニューも好評。

萩博物館

萩まちじゅう博物館の中核施設「萩博物館」

NPO萩まちじゅう博物館が行う
古地図で巡るまち歩きツアー

江戸時代のそのままの町並みが多く残っている萩市は、いまも当時の古地図が使える町

じゅう博物館の田邊副理事長も「萩生まれの私らより詳しい。萩市を愛してくれている」と厚い信頼を寄せる。「萩の町並みや風景が大好きです。高い建物が少なく、電柱も地中化されている箇所が多いので、空がとても広く感じられてきれいです。また、文化財や伝統的建造物に限らず、近世から近代にかけてつくられた町や建物が普段の暮らしの中に住みこなされ、今に息づいている素敵なまちです」（山本さん）。土塀の内には民家があったり、鍵曲※（かいまがり）と呼ばれる道を生活道路として行き交いしている人の姿が見えたりと、歴史と生活が密着しているまちの様子が随所にうかがえる。

萩の物語を伝える「萩・明倫学舎」

もう一人の魅力案内人は、市役所観光課に勤務する福田陽介さん。福田さんは、萩市出身であり萩藩校「明倫館（めいりんかん）」の跡地にあった明倫小学校の出身でもある。福岡県で大学時代を過ごしそのまま社会人になったが、やはり萩市で働きたいと思い帰ってきた。

萩市役所　観光課
福田 陽介さん

萩市は、吉田松陰の妹 文（ふみ）を主人公にした大河ドラマの効果で平成26年と平成27年に多くの観光客でにぎわった。そのにぎわいを維持させることを模索していた時、観光庁の「地域資源を活用した観光地魅力創造事業」に平成27年度応募し、萩市を含む全国31の地域が選定された。萩市は三年連続選定されている。この事業は、観光資源を積極的に活用して旅行商品の造成、名産品の開発など、魅力あふれる観光地域づくりを推進する取組提案を行った地域と観光庁が一体となり、各地域の事業を支援していくものである。萩市は「萩まちじゅう博物館で体感するゆったり・じっくり観光～明治維新150年に向けた誘客促進～」をテーマにして地域の魅力を高めている。前述したとおり、萩まちじゅう博物館という建造物は存在するものではない。萩市を丸ごと博物館と捉え、観光客を市全域へいざなう取り組みを推し進めている。

福田さんは「世界遺産『明治日本の産業革命遺産』の構成資産が萩市に五つもあります。どのような歴史や意義があり日本や世界に貢献したかを伝えなければならないと思っています」と語る。

そこで萩市は、資料展示や映像、パネルなどを使って、分かりやすく楽しみなが

※左右を高い土塀で囲み、道を鍵の手（直角）に曲げた独特な道筋。城下町特有の道で、戦いの際見通しを悪くして防御しやすくした。

萩ジオパーク構想

歴史のまちと知られる萩の土地の大部分は、マグマの活動でつくられた地質や自然の宝庫でもある。萩の歴史・文化・自然と大地の物語を紹介。

●笠山周辺
笠山山頂の展望台より。安山岩でできた小さな溶岩台地が日本海に浮かぶ風景を眺める。

●笠山椿群生林
溶岩台地の上に約25,000本ものヤブツバキが2〜3月頃見頃を迎える。見頃にあわせて、「萩・椿まつり」が毎年開催される。

須佐ホルンフェルス

●須佐湾
黒と灰色のストライプが織り成す断崖。泥と砂が堆積してできた地層にマグマが入り込み、その熱で焼かれてできたホルンフェルス（熱変成作用によって生じた変成岩）。

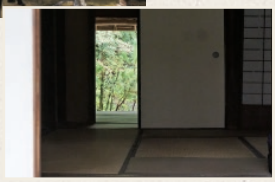
ジオパークとは?
「地球・大地（ジオ）」と「公園（パーク）」を組み合わせた言葉で、大地の成り立ちと人のつながりを体感できる場所

●指月山（しづきやま）と萩三角州
「陶芸の村公園」から萩の三角州を望む

吉田松陰ゆかりの地

●吉田松陰墓所
松陰没後100日に故人の霊を弔い遺髪を埋葬した。門人らが名を刻み寄進した水盤や花立て、石灯籠が墓前に並ぶ。没後150年超えた今も花が手向けられている。

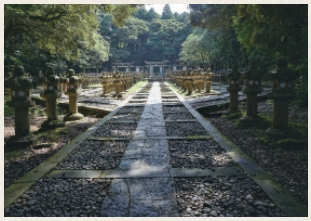
吉田松陰誕生地より指月山や市街を一望できる



●吉田松陰幽囚（ゆうしゅう）ノ旧宅の一角（世界遺産）

東光寺（とうこうじ）

元禄4年（1691年）、3代萩藩主 毛利吉就（よしなり）が創建し、同市内にある大照院と並ぶ毛利家の菩提寺で全国有数の黄檗宗（おうばくしゅう）の寺院。3代〜11代までの奇数代藩主夫妻が葬られている。（初代と12代までの偶数代の墓は大照院）



●石灯籠
墓前には藩士が寄進した約500基の石灯籠があり、整然と立ち並ぶ姿は荘厳な雰囲気がある。毎年8月15日の「萩・万灯会」の送り火では、灯籠に灯が入る。

●総門
国の重要文化財にもなっている

ら萩の物語を伝える施設として、本年3月に、世界遺産ビジターセンターも含めた新たな観光起点施設「萩・明倫学舎」をオープンさせた。また、萩市では日本ジオパーク認定を目指していることから、ジオパークビジターセンターも設置し、市内各地のジオサイトや「大地とともに生きる萩」の物語を紹介している。

さらに、館内の観光インフォメーションセンターには、市民団体などが作成した15地域の「おたからマップ」が置いてある。「かなり詳しい情報を載せています!」と山本さんが自信を持って薦（すす）める詳細なガイドマップであり、その土地の歴史・文化・自然の物語を分かりやすく学べる。

おたからマップ

現代に受け継がれる吉田松陰の教え

高杉晋作、久坂玄瑞（くさかげんずい）、伊藤博文、木戸孝允（たかよし）（桂小五郎）……と、萩は日本の歴史を担うリーダーを数多く輩出した。その中でも萩市の歴史を語る上で特に外せない人物を紹介したい。吉田松陰である。吉田松陰は、学習意欲があれば武士や町民など身分の隔てなく受け入れた松下村塾を主宰した。明倫小学校では吉田松陰の言葉を朗唱する時間があり、福田さんは当時を思い出す。「1学期で1つの言葉を覚え、卒業するまでに18の言葉を唱えます」 現代の子どもたちにも吉田松陰の教えがつながっている。約2年10カ月という短い期間しか教えていなかった吉田松陰の名が後世まで受け継がれている理由の一つが見えた。最後に山本さんがこう結んだ。

「歴史ある建物や偉人、大地とのつながりも、現代の生活の中で伝承され活用されてこそ、その価値や偉大さが生き続けると思います」。

〈吉田松陰の言葉〉
志（こころざし）を立ててもって
万事の源となす
書（しょ）を読（よ）みてもって
聖賢（せいけん）の訓（おしえ）をかんがう

強い志がこの土地に生き続けている。

「萩市をくまなく取材できた」と思い地図を見返すと、行っていないところが多々あることに気付いた。さすが、まちじゅうが博物館!! 再訪を楽しみにしたい。

夏みかん

●夏みかんソフトクリーム
夏みかんを使ったソフトクリームが市内に多く存在する。
萩博物館に併設されているレストランでは、夏みかんソースを使ったソフトクリームが人気。

●夏みかんと土塀
土塀ごしにのぞく夏みかんは、萩を代表する景観の一つ。
明治維新後、職を失った士族救済のために夏みかんの栽培が盛んに行われた。5月に入ると白い花を咲かせてまちじゅうに甘い香りが漂う。

●夏みかんの加工品
5月上旬に収穫される実は生で味わうだけでなく、中身をくり抜き糖蜜に漬け、中に白羊羹を流し込んだ「夏みかんの丸漬け」などさまざまな加工品が作られている

萩の世界遺産

●萩反射炉

●萩城下町

●松下村塾

●大板山たたら製鉄遺跡

●恵美須ヶ鼻造船所跡

世紀を超えて輝く萩ガラス

萩ガラス工房有限会社 代表取締役　藤田 洪太郎さん

古くから茶人の間で「一楽二萩三唐津」と親しまれてきた萩焼は、市内に多くの窯元がある。一方でガラス工房は一つしかない。「萩ガラス」を製造している萩ガラス工房である。「萩ガラスにも歴史があります」と藤田さんは語る。万延元年(1860年)に萩藩士 中嶋治平により製造が開始され、その質の高さから天皇や公家に献上されたが、6年後に製造所が失火により消失してしまうとともに萩ガラスも消えてしまったという。約120年後の平成4年に藤田さんの手で萩ガラスが復活された。地元笠山でとれる岩石「石英玄武岩」を100%使用し、萩ガラスの代表である美しくやさしい緑色（鉄分の色）をしたガラスが生まれる。製造過程にも多くの工夫やこだわりがみえる。「内ひび貫入ガラス」は代表的な一つ。ガラスを三層構造にし、中間層のガラスに熱膨張率を計算してひびを発生させ硬質ガラスで挟む。この技法を育み出すには10年も費やした。ひびは、約3年かけて徐々に進行するので経年変化も楽しめる。また、高温度になる工房は空気の流れを計算し自身で設計。快適な職場環境づくりを手がけたという。設立前までは大阪府に住みセラミック会社に勤務していた化学者の藤田さん。ガラス製造といえばデザインに重きがあると思っていたので驚きの連続。「1つの製品は1人のみで完成させます。誇りをもった製品で勝負しているので値下げはしません」と話す藤田さん。決して安価とはいえない製品だがブランドの力を強く感じる。藤田さんは「歴史は繰り返されるので、100年や200年後に人が見ても恥ずかしくない『萩ガラス』を作りたい」と熱い思いを語ってくれた。

国内のガラス工房では類をみない1520℃という高温で製造している（通常1200℃ほど）。堅くて丈夫なうえに美しさも兼ね備えた萩ガラスに出会える藤田さんの工房へ、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

萩ガラス製造にいそしむだけでなく、従業員の育成にも力を入れている藤田さん。
海外のガラス学校への留学資金や独立資金に廻すため、従業員に強制的に貯金をさせているという。生活しながら貯金するのが大変な従業員には、藤田さん自ら厳しく指導する。また、「自分が社会に出て苦労したので」という理由から講師を招き、英会話教室を開催している。厳しくも従業員の退職後のことまでも考慮している。